
ある日常～その1～

浅木 恭也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある日常とその1

【Nコード】

N7482V

【作者名】

浅木 恭也

【あらすじ】

ロイアイ。素直になれない大佐と嫌いになれない中尉。駄文です。

「大佐——」

そう言いながら机の向こうから、不機嫌な視線を向けるのはリザ・ホークアイ中尉だ。

「何だね、中尉」

話の内容は大方予想がつくが、敢えて余裕を持った言い方をする。

「またサボってましたね。こちらは追加の書類です。」

ちつと内心舌打ちしながら切り返す。

「私は実戦向きなんだ、すまないね」

「ええ、存じ上げています。ですから、私が出る限りのフォローはさせて頂いているつもりです。」

ふうつと一息付くと彼女は続けた。

「そちらは今日中ですので、終わるまでお帰り頂けません。私は少し射撃訓練をしてきます。」

一気に言くと、中尉は扉を閉めて出ていった。

今日は機嫌が悪いらしい。そんな時に射撃訓練に行くのは彼女の習慣だ。やる気無さげに座っていると、帰り支度をしたファルマン中尉が話かけてきた。

「大佐、中尉は今日の夜予定が入っていたようでしたよ」

それだけ言くと、お先に失礼しますと準尉は帰って行った。

誰も居なくなつた執務室で、彼は机から一枚の書類の写しを取り出した。

「予定、か——」

書類には一人の男の軍歴が載っている。中尉は気付いているのだろうか？何時も食事に誘うあの少佐の思惑に。書類を暫く玩んで仕舞うと、彼はのろのろと仕事を始めた。

（少しはやっておかないとまた機嫌が悪くなるだろうしな——）

中尉は執務室を出た後、少佐に今夜の食事を丁寧に断りに行き射撃場へ向かった。

少佐は気にしないで良いと言ってくれたが、今度で3度目なので片身が狭い。しかも毎度同じ理由なのだから頭も痛くなる。

（本当に嫌になるわー）

いつもより多目に射撃をこなし、汗をシャワーで流すと少しすっきりした。それからリザは執務室に向かった。

（今日中に帰れるように本腰を入れてもらわないと）
そう思つて気合いを入れて扉を開ける。

——大佐は執務机にいなかった。

逃げられた！？焦つて部屋を見渡すと、仮眠用のソファーにいるのが見えた。

（もう！目を離すとすぐサボるんだから）

机の上の書類が半分ほど片付いているのを確認して、リザは彼を起こしにかかった。

「大佐、大佐。起きてください。」

なかなか起きない大佐に忘れかけた苛立ちが甦る。

「捨てて帰っちゃおうかしら……」

ボソツと呟くと、ソファーの上の彼が飛び起きた。

リザと目が合うと途端に気まずいように反らす。

（こういうところが憎めないのよねー）

「大佐、コーヒーでも淹れましょうか？」

「ああ、貰おうか……」

リザは給湯室から持ってきたコーヒーを手渡しながら、念を押す。

「コーヒーを飲んだら、さつさと終わらせて帰りましょうね……でないと、本当は出来る仕事溜めてお食事行けなくしたって少佐にばらしますよ」

ぶつと盛大にコーヒーを噴き溢した上官に微笑んで見せる。あーあ、

溢しちゃってと呟きながら給湯室から雑巾とタオルを持ってきて丁寧に拭いている間も彼は固まっていた。

「どうして分かったの？て顔ですね」

「…ん」

咳払いをして誤魔化しているが、今の推測は答えに近かったのだらう。

「方法が、さすがに毎回同じですとね…」

「知っていて、怒らないのか？」

彼は、聞いてしまったという風な顔をしている。

「怒ってましたよ、さっきまで」

「じゃ、なぜ…」

「さあ、どうしてでしょうね」(だって捨てられた犬みたいな顔して飛び起きてくるのだもの…)

「そろそろ、本気で仕事して下さらないと。嫌いになっちゃいます。うです。」

微笑みながら言ってみせると彼は慌て仕事に取りかかった。

それから一時間もしないうちに仕事を片付けて、彼女を呆れさせたのはまた別のお話し。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7482v/>

ある日常～その1～

2011年10月9日11時28分発行